

孤立的でなく、全国的に、それも有機的な関連性を持つものとなつてくる。戦術も巧みで組織的になつていることもこの時期の特色である。

これは都市民による反封建闘争をえがいたものであるが、かかる町人たちの積極的な蜂起と、先の論文にみるおちぶれ行く下層民との関連がどうなるのか、将来に残された問題であると思う。

以上十篇にのぼる論文の紹介と、二・三の疑点や意見を述べたのであるが、理解の未熟さのため誤まつているものがあるかとも思う。殊に近世については、私自身直接に研究しておらず、そのため全く的外れているかも知れないし、その点お許しを願いたい。(A5 四〇六頁 昭和三五年十一月 三一書房刊 定価八〇〇円)

大阪歴史学会編

封建社会の村と町

中 村 哲

大阪歴史学会の創立一〇周年を記念して二冊の論文集が刊行された。同学会古代史部会担当の『律令国家の基礎構造』と近世史部会担当の『封建社会の村と町』と題する本書がそれである。在野の学会として困難な条件を克服しながら研究をすすめて、多くの業績をあげてきた大阪歴史学会が一〇周年をむかえ、ここに記念論文集を發表されたことをよろこび敬意を表したい。

さて本書は「畿内先進地域の史的研究」という副題が付されているように、近世、とくに近世後期の大阪周辺地域の社会経済史の個別研究が中心となり、それに戦後の当該地域の研究史の整理と展望を加え、一〇編の研究論文よりなり、巻末に「摂河泉州農民闘争年表」と「摂河泉史文獻」がつけられている。「まえがき」の冒頭に「封建社会から近代社会への移行(封建解体)過程は、それが典型的に経過したとされる西ヨーロッパのばあいにも、複雑・多岐の動向にみだされている。そのうえに特殊の停滞性・後進性をかかえこんだ東洋諸国、また日本のばあい、それはあるいは埋没され、あるいは曲折した形であられる。そのようなものを幕藩体制社会のうち追及することは、いうまでもなく、日本近世史研究のひとつの課題であつて、近世後期の問題は明らかにここにしぼられてく

る」と述べられているように、この論文集の中心テーマは封建制から資本制への移行の問題であり、先進地帯たる大阪とその周辺地域がこの問題を追及する上で重要性をもつてくる。昭和三年に大阪歴史学会が発足した当時、すでに「近代日本の構造を明らかにする為に、先進地域の実証的研究が必要な事は論を俟つまでもないであろう。その典型的なるものとして、大阪及びその周辺を対象にして、このような果題を果そうとする試みは意味のあることであろう」と当時の委員の一人である津田秀夫氏が述べており、こうした視角は大阪歴史学会の創立以来一貫してとられてきたといつてよい。

さて、基本的視角は共通であつても各論文の追及している問題はそれぞれ異なつている。各論文について簡単にみることにしよう。

1 近世大阪における『青物』の流通問題——天満市場と百姓市の対抗—— 小林 茂 大阪周辺地域の商業的農業として綿作、菜種作、さらに最近では米の商品化の問題がとりあげられてきたが、それらとならんで青物・蔬菜もとくに大阪に近接した西成・東成・住吉郡では重要な商品作物でありながら、この地域が現在全く都市化してしまい村方文書がきわめて乏しいために、研究がおくれているのが現状である。この青物作を流通面から独占的な天満市にたいするしつような農民の闘争——天満市の独占権の弱体化と百姓市の形成の問題としてとらえている。

2 天保三年油方改正仕法制定過程における燈油統制政策の転換事情 津田秀夫 この論文は「近世後期における絞油業の展開と幕府の統制について」と題する大きな研究の一部であつて、その意味では別に発表されている研究とまとめて検討するのが適當である。

この論文は国会図書館上野支部所蔵の旧幕引継文書により幕府の商業政策の重要な一環としての種物及び油の統制政策を扱つたものであり、各地の絞油業の展開をおさえ、大阪油市場への油の集中をほかつた「明和の仕法」が大阪周辺や西国などの絞油業の展開におされて、次第に実効を失い、幕府はその対応として「明和の仕法」を改め、実状を調査の上、それに即して政策転換しなければならなくなつた過程を幕府の政策立案過程を中心に分析している。

3 封建都市酒造業の展開——撰津川辺郡伊丹郷を中心として—— 中部よし子 酒造業の研究はかなり古くから行われてきたが、最近では灘、西宮などの全国有数の酒造地帯のすぐれた研究がつきつきと発表されつつある（長倉保氏の諸研究、『西宮市史』等）。中部氏の研究もその一つとして伊丹の酒造業をとりあげている。近世初頭には、京、大阪の酒造業が優勢であつたが、次第に伊丹・富田等の在郷町の酒造業が抬頭し、一七世紀後半、幕藩体制の確立とともに全盛期を迎えた。しかし、幕府の流通体系を前提としたものであつたため、その後灘を代表とする農村酒造業の抬頭になやまされ、中期以後停滞ないし、衰退に向う。この過程を領主統制、原料たる米の領主的商品流通を中心に追及している。

4 近世西撰における「農民層の分解」 山崎隆三 山崎氏は周知のように数年来、近世から明治期にかけての農業生産の発展、「農民層分解」を追求し、すぐれた業績をあげてきたが、この論文は、これらの研究の集大成的な位置を占めているものである。撰津武庫・川辺両郡四〇カ村をとりあげ、石高所持別構成によつて「農民層分解」を一七世紀後期から約二世紀にわたり、五つの時期にわ

けて考察し、ついで石高所持と農業経営規模とを関連せしめて、小商品生産の一般的成立と小ブルジョアの経済制度と地主制の二つの経済制度の生成、発展を分析している。その要点は①「分解」の起点は一八世紀後期であり、この段階では没落するのは五石未満の貧農層であり、上昇する農民は経営を拡大して富農の発展をとげる、②幕末に「分解」の第二段階に入り、中農層（五〜二〇石）の「分解」がはじまり、一方に大地主が成立してくるが、富農経営は持続し、小ブルジョア制度と地主制が併存しており、③地主制が小ブルジョアの農業を圧倒して確立に向うのは明治一〇年代以降であり、その場合富農層（二〇―五〇石）の動向が決定的である（この部分は同氏「明治期西撰における『農民層の分解』」〔ヒストリア〕二七号）で展開されている。大阪周辺地域は近世社会経済史研究のもつともすんだ地域であるが、農民層分解ないし地主制の研究は一村限りのものが多く、かなり広い地域にわたり多くの村の史料を集めて分解の傾向を分析し、「分解」の各段階（一八世紀後半、幕末、明治一〇年代）を確定し、それぞれの段階の主要な特徴を明らかにしたことは大きな成果である。今後「分解」の各段階の具体的内容を追及するとともに山崎氏の「分解」論の理論的構築を期待したい。

5 西撰における中農層の商品生産 八木哲浩 八木哲浩氏は撰

津武庫郡上瓦林村岡本家の史料を分析した『封建社会の農村構造』を発表して以来、武庫郡の農村構造を精力的に研究し、最近では同地域の米の広汎な商品化の問題をとりあげている。この論文は同地域の豊富な農業経営史料を使つて持高一〇石の中農層の農業経営の内容を明らかにしている。近世における農業経営史料はほとんど上層農民のそれに限られ、中農以下の農業経営の内容を明らかにすることはきわめて困難である。この地域は八木氏、山崎氏等の努力によつて近世の農業経営史料がもつとも豊富な地域であり、八木氏は主としてこれを利用して一八世紀後半の持高一〇石の自作中農の経営のモデルケースを算定しているのである。その結果、菜種作地域では中農でも米が最も重要な販売作物であり、しかも反収の多少によつて菜種よりもはるかに大きく販売量が左右され、したがつて農民経営を發展させ、分解の基本的条件となるのは米作であることが明らかにされている。米の商品化の問題が最近とりあげられ、従来菜種作地帯とされてきたこの地帯が次第に商品生産の米作地帯の性格をもつことが明らかにされつつあるが、この論文はそれをさらに農業経営の分析、とくに商品生産のもつとも一般的な担手である中農層の経営内容を明らかにすることを通じて、より明確にされたといえる。今後山崎氏の設定された「分解」の各段階によつて農業経営の内容がいかに変化するかを明らかにされ、「分解」の生産力的要因を規定されることを望みたい。

6 近世畿内小作料の構造 竹安繁治 竹安氏はすでに近世小作

料についての実証的研究をいくつか発表しているが、この研究もまたそのすぐれた一つにかぞえることができる。大阪周辺地域においてはすでに近世初期から主として本敵（検地帳上の反別）と有敵（実面積）の差にもとづく萌芽的利潤と地主取分が成立しており、その後生産力の上昇による反当取量の増加により本格的な地主制の展開をみ、中期には小作経営も不安定の基盤をもつていたこと、したがつて耕地については台帳上の反別、分米よりも有敵、宛米が実質

的基準としての規制力をもつにいたつたと述べ、幕末における小作経営の発展的傾向を強調している。近世における地主制の具体的存在形態については、地主制にかんする多くの研究にもかかわらず、意外に明らかにされていない現状において、竹安氏の研究は貴重な意義をもっている。しかし、同氏の実証もまだ一般的傾向を明らかにするには至っておらず、同氏の提出しているいくつかの命題についても十分反論が予想されるし、相互に矛盾しているものもある。しかし、また近世における地主制形成について、それらいくつかの問題を指摘したこと自体にもこの研究の意義があると考えられる。

7 幕末における畿内農村の一考察——河内綿作地帯を中心として——北崎豊二 最近の大阪周辺地域の近世社会経済史研究は摂津、和泉の研究が比較的多く、かつて研究の中心の対象地とされていた河内綿作地帯は比較的少ないが、北崎氏の研究はこの河内綿作地帯のかつて古島、永原氏が『商品生産と寄生地主制』で扱った地域と同一の地域を対象としている。とくに幕末に領主の財政窮乏がひどくなり、中小領主は商人や有力農民から借財し、これを「村方借用銀」という形で農民に転嫁する村借をめぐる農民の動きを中心に分析している。

8 近世河内狭山池の分水慣行 福島雅蔵 わが国の農業は水田耕作を根幹とするから、水利の問題は社会経済的にも、技術的にもきわめて重要な意味をもっている。南河内、和泉地方は瀬戸内型の気象条件によつて溜池灌漑が普及しているが、この研究は近世初期に五万五千石、幕末でも三万石の耕地を灌漑した河内狭山池の分水慣行をとりあげている。池管理の推移、池水の配水法、池水灌漑区

域の変遷、池水分配の封建的性格にわけて近世初期から幕末にわたつて述べており、分水慣行の事実を中心とし、農村構造や領主支配との関連等についてはほとんどふれられていないが、水利とくに溜池灌漑の問題の研究はおこなれている分野なので、狭山池が南河内の広汎な地域に関連をもつこととともに大阪周辺地域のかかる問題についての研究の一つの基礎をおくものといえよう。

9 河内石川家領の貢租——日本貨幣地代成立史研究の一試論——酒井 一 副題にあるように、幕藩体制の解体過程を土地所有（その経済的表現としての地代）の側面から追求し、地租改正の歴史的前提を明らかにしようという意図をもつて書かれている。具体的には河内古市・石川両郡にわたる下館藩とその分家の旗本石川家領を対象とし、幕末期を中心として貢租体系とそれに対抗する農民勢力、対抗の具体的過程（石代納一件）について詳細な分析を行っている。近世の貢租体系については大阪周辺地域でも研究は行われており、最近米の商品化の問題と関連して在払等の研究が漸く行われるようになった段階であり、その意味でこの研究は貢租体系についての本格的研究の先駆とみることができ、それだけにこの研究でも明らかにできていない点が多く、石代納を貨幣地代として積極的に評価することの研究の中心的主張も十分説得的ではないが、この研究から酒井氏の問題意識を展開するためには天領の貢租体系を農村構造と関連させて分析することの必要性を感じる。

10 近世後期大阪周辺農村研究の動向 塩野芳夫 以上の九編の論文が大阪周辺地域の個別研究であるのにならして、これは本書の最後におかれ、この地域の戦後の研究史を扱い、しめくくりの意味

をもっている。最初に近世後期のこの地域の研究の共通する問題意識が「日本における産業資本の自生的展開」資本主義成立の芽をこの地域農村の動向に求めようとしている点」にあるとし、これを農民闘争と農民の階層分化と地主制の二点にしほつて問題点を中心として整理している。

以上、紙数の関係できわめて簡単な紹介におわり、各論文の内容の紹介すら不十分なものとなつてしまつたことを執筆者をはじめ読者諸氏におわびしなければならぬ。さいごに巻末の「撰河泉州農民闘争年表」と「撰河泉史文獻」は今後この地域を研究する者にとつてきわめて便利であることをつけ加えておく。(A5判五九四頁 昭和三十五年十月 吉川弘文館編 定価一、二〇〇円)

別技篤彦著

東南アジア諸島の居住と開発史

石川 栄 吉

東南アジア研究の重要性ということが、しばしば語られている。事実、ここ数年の間に、諸大学あるいは民間にも、数多くの東南アジア研究の機構、もしくはグループが形づくられてきている。日本の置かれている文化的・社会的・地理的環境に照らして、このような動きは当然というよりも、むしろ遅きに失したとさえいえよう。敗戦の結果した止むをえぬ事態であつたにせよ、この間に研究上のいちじるしい遅れをとつたことは、まことに残念なことであつた。この地域がなごらく欧米諸国の植民地体制下に置かれていたためとはいえ、欧米諸学者の研究に、なお多くを依存しなければならぬ現状は、まだ当分続くことであろう。

このような、東南アジア研究の一般的状況下に、別技篤彦教授の二十年にわたる本地域の研究成果『東南アジア諸島の居住と開発史』が世に送られたことは、まことに喜ばしいことであつた。著者別技教授は、太平洋戦争中、約三年半の歳月を、インドネシアの現地調査に費やされ、この間、バタヴィア(現ジャカルタ)のオランダ王立自然科学協会図書館を研究室として、文献研究を進める一方各地の実地調査を併行して、多くの貴重な資料を蒐集された。その大半が、敗戦・引揚に際して失なわれたということは、我々もまた